

●れんさいエッセイ●ペンのうちそと●7

芝居ばなし

三枝和子

作家

え・元永 定正

「シバイ、コンニャク、イモ、タコ、ナンキン」だったか、「イモ、タコ、ナンキン、シバイ、コンニャク」だったか。「女の好くもんでっせ」と、うちのおばあちゃんたちが言っていた。「イモ、タコ……」の方が正しいと思う。「シバイ、コンニャク……」は、よほどの芝居好きが勝手にこしらえたのだろう。それとも私が芝居好きなので、そう思いこんでしまったのか。

しかし女ばかりとは限らない。小説家のなかにはずいぶん芝居好きがいる。だから、女で小説家の私など、かなり芝居にトチ狂っても不思議でない、妙な自己弁護をして、自分の芝居好きを容認している。好きな芝居をジャンル別に言くと、「一に文楽、二にお能、三、四が無くて五にタカラヅカ」ということになるうか。以前は、三、四に歌舞伎や新劇が入っていたが、この頃、何故か、ちよっと飽きた。

話がノッケから横道に逸れているが、実は、自分の小説が上演されることが書きたいのだ。モチロン、NHK大河ドラマなんぞじゃありません。東京は池袋のル・ピリエ。アングラっぽい劇団が手がけるのです。『八月の修羅』。私の最初の長篇小説だ。

以前、『処刑が行なわれている』という小説が、

これは「青年座」で、演出家の五十嵐康治氏によって脚色、上演された。したがって小説の劇化は二度目だが、今度は私自身が脚色した。五十嵐氏に「あなたの小説は演劇的だ。戯曲を試みませんか」とおだてられ、四作ほど書いた経験があったからである。

そのうちの二作、「喪服を着た九官鳥」と「六つ目の首、それはお前だ」は「劇団神戸」が文化ホールで上演して下さったから、観ていただいた方もあると思う。この初演は「青年座」と、その研究所を出た若い人達のつくった「演劇集団・はち」とであったが、その役者の何人かが、新幹線で、わざわざ神戸まで舞台を観に来たのには驚いた。自分たちが初演したものを、他の劇団がどんなふうにするかが気になるらしい。

「創作劇に限り、その逆はやりません」と役者たちは言う。つまり、既にどこかの劇団が初演なり再演なりしているものは観に行かない。自分たちのオリジナリティを先入観なしで発揮したいらしい。

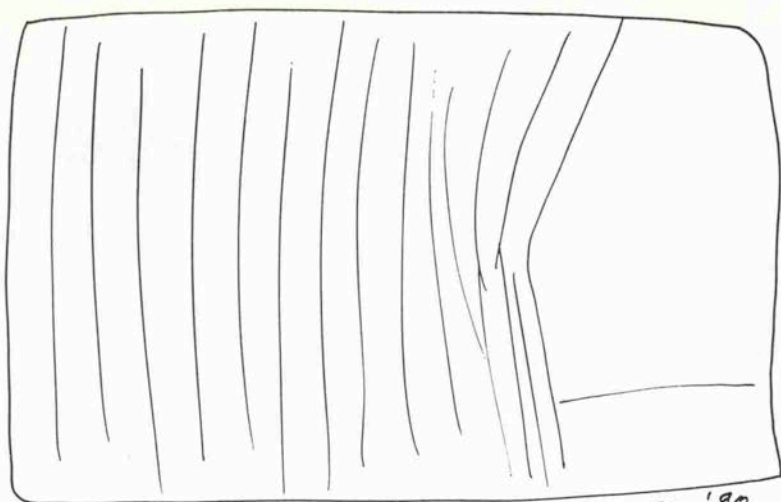
芝居は、同じ脚本でも演出家や役者によってずいぶん違う。そこがまたナマ、モノの面白いところだが、前記の五十嵐氏など、私の脚本について、こんなことを言う。

「三枝さんの作品、ト書きがありませんねえ。ト書きを書いて下さいよ」

なるほど、言われてみればそうである。書きながら、私としては科白が次々に浮かんで来るので、ついついト書きがおろそかになる。それに、しぐさなど役者が考えて工夫すべきものと思っているので、むしろ書かない方がいい。

すると五十嵐氏は首を振る。

「そうじゃないんです。ト書きに書かれていることをその通りやろうとする役者は駄目です。ト書



S. Moronaga '82

き以外のことをやろうとすると、脚本と役者のあいだに緊張関係が出来て、初めてオリジナリティが生まれるのです」

ふうん。私は感心して聞いている。物を書く人間とは異った次元でのオリジナリティの表現が面白くてたまらない。役者の身体（あえて口とは言わない）にかかると、自分の書いた言葉が、全く違った相貌を持って現われて来るのが愉しくてたまらない。

芝居に関わっているあいだは血が荒れる、と言われる。命取りだ、とも。じっさい、一時期、私は毎日々々の稽古場通い、小説の方が書けなくなってしまった。これではならじと自粛自戒。以後、再び芝居は観るだけの側にまわり、一に文楽、二にお能……という生活が続いていたのに――。

ただ、今年は、この「神戸っ子」にも最初に書いたけれど、うちの寺の用事が忙しくて幸か不幸か関西を動けない。致しかたなく『八月の修羅』は稽古場どころか上演期間中に上京できるかどうかとも覚束ない。それでも何とかして、せめて初日に顔を出し、朝一番の新幹線で帰って来ようと、いまから必死の時間の遣り繰り算段。我ながら、その執着ぶりに、いささか愛想がつきて来た。

むろん、これという私の作品がマイナーだからであって、例えばサルトル（例えば大きすぎて、自分でも噴き出しそうになっているのだが）みたいに、一時期、毎晩、自分の芝居が世界各国のどこかで上演されているのであれば、自然とその対応の仕方も変って来るのだろうが、と。しかし、こうした文章を書くだけでも嬉しいのだから、もはや、救いようがないところまで私の芝居熱がアガっていることは否定できない。

三宮グレイス神戸B1



ローブニシジマが
ちよつとだけ移転いたします。

三宮グレイス神戸B1の
南東カドから北西カドへ場所移動いたします。
電話もサービスもそのまま
11月23日リフレッシュオープンいたします。



技術に贅を尽しファッションを
常に美しく——ニシジマ

●型くずれの防止 ●素材感の回復 ●カルテの作成
●お客さまのお好みに合せた仕上 ●ファッションクリー
ニングの最新情報の提供

神戸市中央区三宮町2丁目10番7号
グレイス神戸B1 ☎(078)332-2440

Rosemonde

ロズモンド

HAND-MADE

Cookies
Raisin &
Orange-Peel



¥1,000 ¥2,000

北 欧 の 銘 菓

ユーハイム・コンフェクト

■本社・工場・熊内店 神戸市中央区熊内町1-8 TEL 221-1164

心に残るカウラの日本人墓地と

日本文化センター・日本庭園

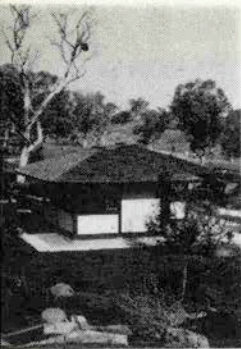
立田雅彦（県立夢野台高校教諭）

私は、民族音楽に興味をもち民俗楽器を集めるために多くの国を訪問するが、出来るだけ時間をさいて博物館や美術館を訪れることにしている。楽器は勿論のことあらゆる角度でみてみるが、今まで何か一つ物足りなさがあった。

ところが、この八月にオーストラリアへ出かけた時ニューサウス・ウェルズ州のカウラの町を訪れた、その時のことである。

カウラには、かつて第二次世界大戦の時の捕虜収容所があり、南太平洋から九〇〇人が収容されていた。一九四四年八月五日早朝に日本兵が、ナイフやバットで五人のオーストラリア兵を殺害し脱走を企てる事件がおこった。その為二〇七人が機銃で殺されたが、カウラの人達は日本人捕虜を手厚く埋葬した。

一九六三年カウラ市長に就任したオリバー氏が、翌年日本人墓地の整備に取りかかった。彼は戦時中オーストラリア各地で亡くなった日系市民と一緒に墓地に葬りそ



カウラの日本庭園

の数は五五二にもなった。更にその墓のそばには、五人のオーストラリア軍人を含む二十九人のオーストラリアの人達も共に葬った。

一九七九年神戸を訪問したオリバー氏は「戦争で中東やニューギニアに行った時異国の地で外国人によって建てられたオーストラリア兵の墓が心にやきついた。戦争は憎いが亡くなった人は私達と同じ人間。もう罪はない」と語った。以後墓地はカウラの市民によって管理され世話をするカウラの人達は両方の墓を決して区別することはない。私が訪れた時も手入れしている人をまのあたりにして胸があつくなった。毎年手厚い供養が行われるとのことである。更に墓地のそばには一九七九年十月に日本文化センターと日本庭園が作られた。それは二度とこういう事が起きないためにというカウラの人達の暖い心遣いと日本理解の気持ちから出来上ったものである。

私は日豪の人達の冥福を祈るために日本から線香を持参した。墓にはきれいな花が供えられていた。日本庭園の泉水には水が流れ金魚や鯉が泳いでいる。モーターで揚水してあるとのことである。きけばこの三年間雨のあまり降ら

ないカウラでは、その水は貴重なものであり町にとっては大変な支出である。四阿も築山の近くにあり、燈籠なども配置してある。中島氏による京都の御所風の設計である。囲りにユーカリの木があるのがオーストラリア的で何とも印象に残っている。

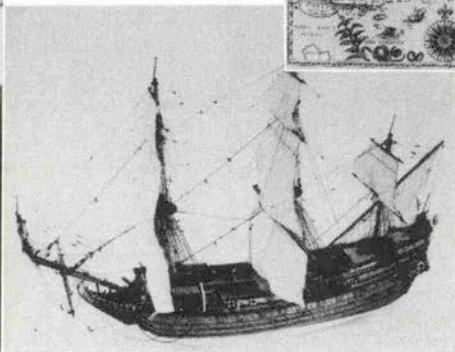
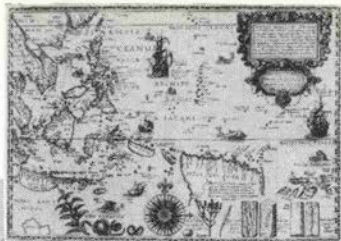
日本文化センターには南画や有田焼のコレクションや打掛や人形等が展示され、書棚には日本に關係ある本や資料が自由に利用されるように並べられていた。過去に日本人がおこった暗い事件を許し、日本を理解しようとしているカウラの人達の好意に胸の痛くなる思いがしたのである。泊めてもらった家の少女の学校を見学する機会があった。その高等学校で日本語の授業をみたが、皆熱心に勉強している前向きな姿勢に感心させられた。彼女も来年は日本語の实地勉強のため来日するとのこと最近オリバー市長から訪問に對しての礼状が届いた。その便りには痛ましい戦争の思い出をこえてカウラの町ぐるみで日本理解に努めようとしている気持ちが切々と書き添えられていた。この次カウラを訪れる時は日本人として、日本の資料等を多くたずさえようと思っている。そしてあのカウラの墓地が永遠に守られ、日本文化センターや日本庭園が存続し日本とオーストラリアの心のかけ橋となることを祈ってやまない。

いつまでも心に残るカウラ訪問であつた。

交流



- ◀聖フランシスコ・ザビエル像
(17世紀初頃)
- ▶モルッカ諸島の地図
- ▼プリンス・ウィレム号の模型
(17世紀オランダの船)



三杉隆敏さん

文献にはない東西交易の面白さ
吉村 シルク・ロードといえば、何と言っても「陸路」がポピュラーですが、十一月三日にオーブンする神戸市立博物館の開館記念展のテーマは「海のシルク・ロード」ですね。もともと、これは三杉さんが命名されたのですが、

そこでは、オーブンに先立って、「海のシルク・ロード」の提唱者でもあり、今回の特別展のためにオランダまで行かれた三杉先生と、日本工芸史を専攻されている吉村先生に、今回の「海のシルク・ロード」展について、いろいろとお話しをお伺いしたいと思います。

展示会の構成としては、第一部「波濤を越えて」では大航海時代を中心とする東西文化の交流の様子を、オランダ東インド会社（一六〇二年～一七九九年）によって交易された約二四〇点、また、第二部「日本における異国趣味」では、安土桃山時代を中心に江戸時代までの日本のなかの西洋趣味を約一六〇点展示することになっています。

兼ねてから建設が進められていました神戸市立博物館が、十一月三日にいよいよオーブンすることになりました。神戸に新しい文化の拠点、また一つ増えるわけです。開館を記念して、特別展「海のシルク・ロード」が十一月三日から十二月十九日まで開かれます。これは、そのサブタイトルに「国際文化交流・東西文化の接触と変容」とありますように、近世以前の海上交易路の歴史、東西文化の接触と変容の様子を展示する内容となっています。

●対談

壮大な東西文化の

神戸市立博物館開館記念特別展

〈海のシルク・ロード〉展によせて――

三杉 隆敏 VS 吉村 元雄

〈小原流芸術参考館副館長〉

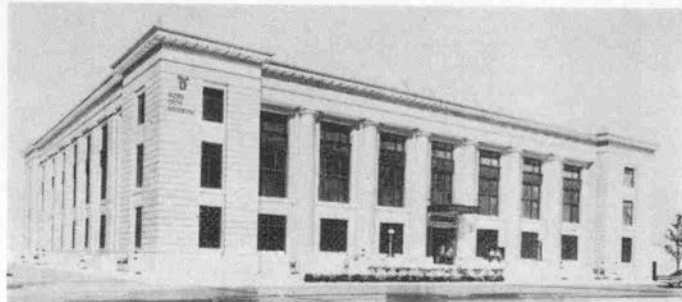
〈関西学院大学教授〉

▼安南色絵雲鳳凰文皿

明代の色絵磁器に影響を
受けたベトナムの名品



▲人物像螺鈿盒子
シーボルトの友人のひと
りと思われる像



どういうきっかけからですか。

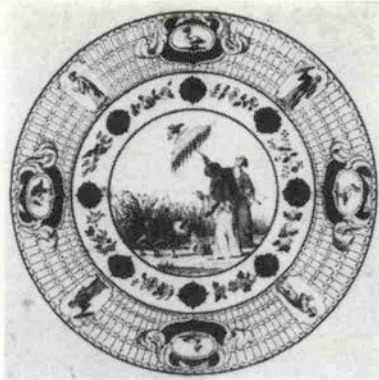
三杉 私か「海のシルク・ロード」に興味を持つことになったそもそのきっかけは、もう二十年前になりますか、イスタンブールのトプカピサライ宮殿で一万二千点に及ぶ中国磁器のコレクションを目の当たりにしたことで、もともと焼物好きの私ですから、コレクションの美しさに魅せられたことはいうまでもありませんが、それ以上に心にひっかかったのは、これ程大量の焼物をどのようにしてここまで運んだのだろう、という疑問でした。しかも、驚くことに世界中のどこへ行っても膨大な量の中国製磁器が見つかるんですね。

すぐに頭に浮かぶのはラクダのキャラバンですが、大量輸送という意味では限界がある。そこで思い当たったのが船による海上輸送、つまり「海のシルク・ロード」というわけです。帰国後、文献史料を漁りますと、マルコポーロや鑑真和上に始まって海上交易に関するものがたくさんある。とくに、一六世紀のいわゆる大航海時代以降、ヨーロッパはむしろ、海を通して東洋にアプローチしていた。それまで海について知らなかったことに、我ながら恥入った次第です。我々の学生時代、歴史の時間にその辺のことは習ったんですかね? (笑) 習わなかったかな。

吉村 まあ、大学で専門的に研究するなら別ですが、今もほんの上っ面をなでる程度でしょう。また、現代人が東西交流を考える時、陸のシルク・ロードのイメージが強いのは、確かにNHKの例のシリーズの影響もあります。が、大正ロマンチズム以来の伝統だと思うんです。とり



吉村元雄さん



▲コルネリス・ブロンクの絵付発注用原画
▶同原画による中国・景德鎮の磁器
▲同じく伊万里の磁器

わけ、白樺派の木下李太郎らがつくり上げた文学的イメージがバック・グラウンドとなって、日本人の心に強く焼きついているんでしょう。反面、海にだってロマンを感じないわけではありませんが。

三杉 現地での調査や文献を読むなかで面白かったのは、絹はもちろん香料、漆器、ベッコウ、はては黒人奴隷に至るまで船で運ばれていましたが、それらのほとんどが腐敗するなどして残っていないのに反して、幸いにも、焼物は破片になっても残り、海岸で採取することも可能だということです。また、最近はこちらとした沈没船ブームで、韓国の沖では一四世紀初頭に沈没した船から一万五千点が、インドネシアでも六千七百点に及ぶ焼物が引きあげられるなどあちこちで貴重な発見が相ついでいます。ただ、そのほとんどが考古学的興味ではなく、骨董屋の手で行われているため、金目の物しか引きあげられないのは残念なんです。ところで、一六一三年にセントヘレナで沈没したオランダ帆船ヴィテ・レーウ(白い獅子)号から引きあげられた中国明代の景德鎮「染付芙蓉手花鳥文兜鉢」が、今回の展覧会に陳列されるので大変喜んでいんです。こうした引きあげ品を見て行くと、文献には書かれていないアラビア商人や中国海賊による密貿易の実態が分かり、なかなか興味深いですよ。

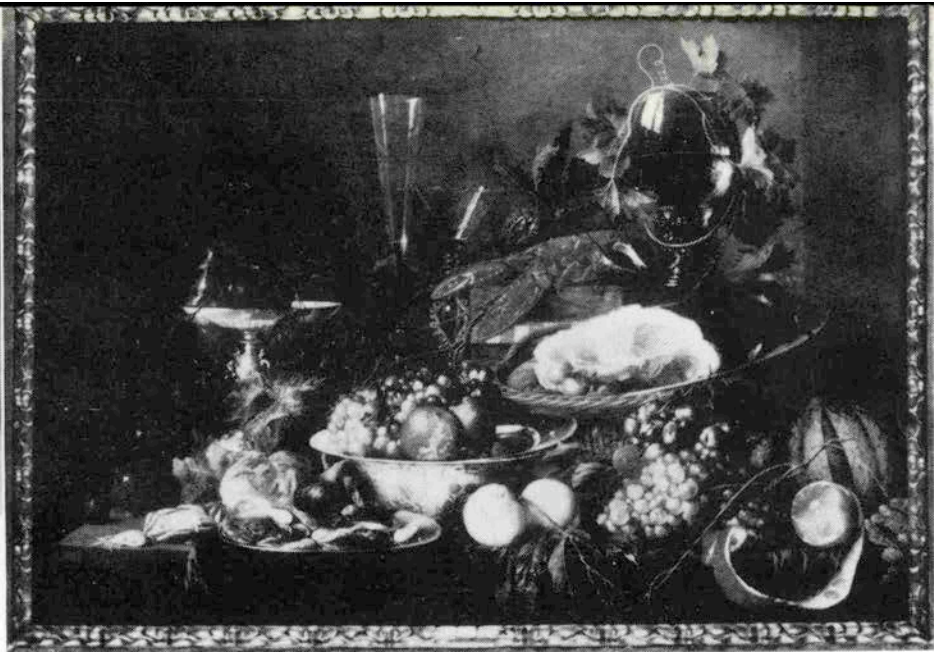
「目玉」は「オランダ商館長江戸参府図詩繪簞笥」

吉村 私の専門は日本の工芸史ですが、工芸品の分野でも十年前に渡欧した折、三杉さんと同じようなシヨックを受けた経験があります。それまで、輸入用に作られながら色々な事情で国内に残った漆器・磁器が何点もあり、珍重されていたことは知っていましたが、それらの類品があればど大量にヨーロッパへ渡っているとは考えてもみませんでした。私が東西交流を本格的に研究する必要を感じたのもその時です。

三杉 日本では一六一八世紀にかけて、南蛮・紅毛趣



▲染付芙蓉手花鳥文兜鉢
(中国明代末期の景德鎮輸出窯)



▲「食卓の静物」。17世紀オランダのデ・ヘームの作。明代染付磁器皿（芙蓉手兜鉢）が描かれている。

味と呼ばれるヨーロッパ・ブームが起りました。しかし、同じ頃、ヨーロッパでもシノワズリー（中国趣味）という名の日本を含む極東趣味が大変な人気を呼んでいた。今風に言えば、東西で同時にカルチャー・ショックが起こったわけですが、これを支えたのが、他ならぬ「海のシルク・ロード」による大量輸送だったのです。しかも、陸のシルク・ロードが事実上、終息したにもかかわらず、「海のシルク・ロード」は二〇世紀のいまも脈々と生き続けている。

今回の展覧会では世界一のコンテナ港を持つ神戸にふさわしく「海のシルク・ロード」をテーマに、第一部「波濤を越えて」では西側で、第二部「日本における異国趣味」では東側で、それぞれ起こったカルチャー・ショックの有様を重層的に展開していきます。

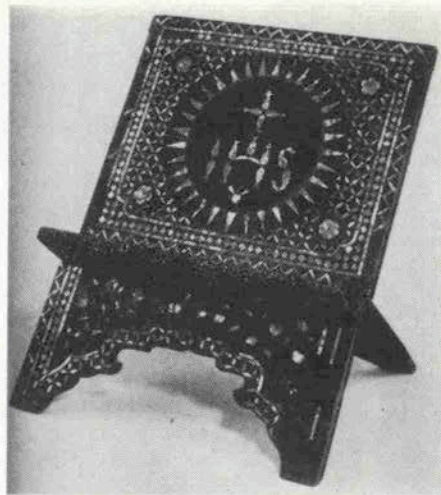
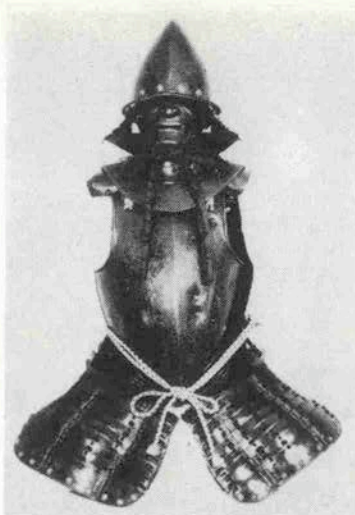
ただ、東西の交易史をすべて網羅することは不可能なので、今回は一七世紀以後ヨーロッパの国としてはわが国と、もともと関係の深かったオランダの東インド会社の活躍に的を絞って構成しています。ですから、海外からの二百三十七点に及ぶ借用展示品はすべてオランダのものです。

吉村 なかでもオランダ王室秘蔵の「オランダ商館長江戸参府図蒔絵簞笥」は、展覧会の目玉商品といえますね。

江戸初期の京都の工房で作られた輸出用蒔絵簞笥の一種なんです。今まで本に写真が載ったぐらいで、日本はもちろん、世界でも公開するのは初めてのはずですよ。

三杉 東洋の特産品という絹、漆、香料、茶と色々あります。なかでも磁器は、今でこそ世界のあちこちで生産されていますが、一七一〇年にマイセンの窯で作られるまでは、ヨーロッパ人にとってどうしても真似の出来ない技術でした。それだけに、中国への憧れは大変なもので、王侯貴族にとって磁器を持つことは一種のステータス・シンボルだったともいえるでしょう。それは東洋の場合も一緒で、「人の花は紅い」「隣りの芝生は青い」という、互いの憧れ合いが文化交流の下地になっている。

▼イネ肖像図螺細盒子（重文）



◀南蛮銅具足（桃山時代）▲七宝繋荷絵螺細書見台（16世紀）

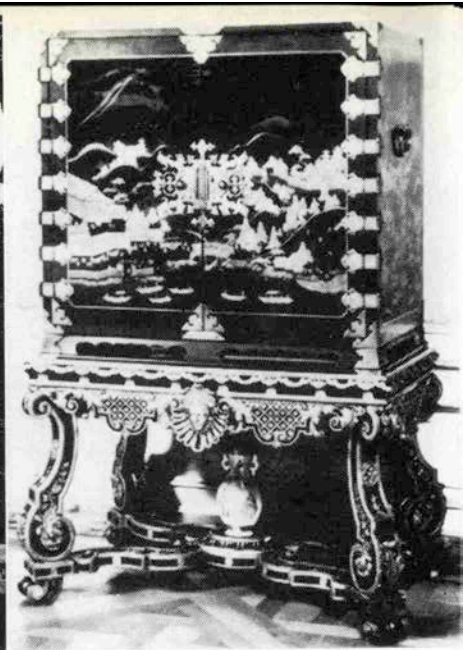
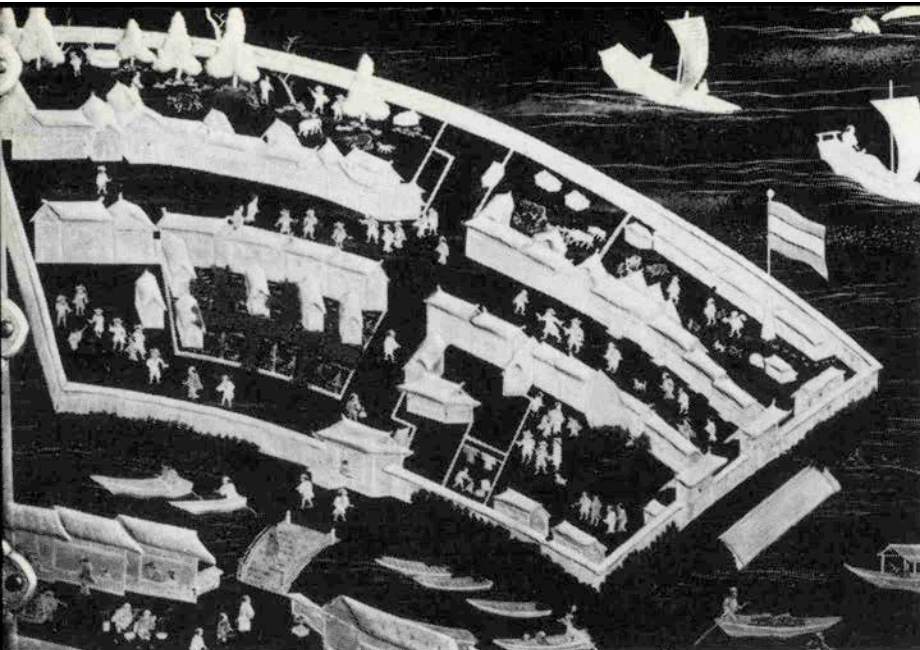
当時のヨーロッパ貴族たちがいかに東洋の文物を珍重していたかは、明代染付磁器皿が描かれているオランダの画家デ・ヘームの「食卓の静物」などの静物画、風景画でもうかがい知ることが出来ます。展覧会では絵の中に描かれているのと同種の皿を並べて展示しますので、二つを見比べるのも面白いでしょう。

吉村 先程、三杉さんが密貿易について触れましたが、東洋での交易には密貿易のほかに私貿易というのがあります。これは例えばオランダ東インド会社の社員、今で言う商社マンでありながら、ポケットマネーで正規のリストに載っていない商品を買ひ漁り、個人的に商売をしたものなんです。これが結構、儲かったらしく、一回の私貿易で一生食べられるだけの収益があったとも言われています。こうした余得があったからこそ、当時の船乗りは身の危険もかえりみず、我も我もと東洋を目指したのでしょうか（笑）。

三杉 例えば、陸のシルク・ロードにしても、過酷な自然の中を黙々と進んでいったキャラバン隊員たちの頭の中には「金儲け」のことしかなかったでしょうな（笑）。

吉村 正規の貿易品でありながら、記録に生産国が書かれていない物もたくさんありますね。これは中国人が仲介となって、中国やインドあたりでヨーロッパ人に売るというルートで扱われたためです。例えば中国の漆の屏風をヨーロッパではコマンデル・スクリーンと呼んでいます。コマンデルスとはインドの東海岸を指す言葉なんです。また、欧州に残っているコレクションの収蔵品目録を見ると、国籍の欄に「日本」と書いてあるものはまずない。「中国」と書いてあればまだましで、ほとんどが「インド」か「東インド諸島」としか書かれていないんです。ことほど左様に、ヨーロッパ人にとって日本という国への認識は低かった。

三杉 そうした混乱が起きるのは、当時の貿易形態の複雑さに負うところが大きい。例えばオランダ商館はジャカルタのバタビヤ、タイのアユタヤを始め世界中に三十



▲オランダ商館長江戸参府図蒔絵簾蜀(右)簾蜀側面に長崎の出島の俯瞰図がある(左)

八カ所もあった。その商館同士が物資を回していたのであって、普通考ええるような日本対オランダの単純貿易ではなかった。現在の商社がやっている三角、四角貿易が一七、八世紀にじゅんじゅん行われていたのです。商館同士ですらそうなんですから。いくつもの国が介在した場合は推して知るべしでしょうな。

吉村 文化交流とはそういうものですね。「影響」というのも似ていて、決してワン・ウェイではなく、相互に影響し合うものです。例えば柿右衛門の焼物にしても、あれは明かに中国の五彩を写し取ったもの。ところが、今度はこれがオランダ人に気に入られ、本家の中国までが日本の柿右衛門をコピーしている。つまり、様式の逆輸入ですね。

国内ではシーボルトのコレクションが見もの

三杉 日本が磁器の輸出国として脚光を浴びたのには、もうひとつ理由があるんです。中国が明朝から清朝に政権が代わった時(一六一六)、社会混乱のため磁器貿易がストップしてしまっただけで、オランダは止むを得ず、日本へピンチ・ヒッターを頼んだ。こうした大量発注があったおかげで、磁器製法が伝来して間もない日本が、またたく間に世界的な磁器輸出国になったのです。オランダは、ベルシャにもピンチ・ヒッターを出しており、展覧会では該当する作品を何点か陳列する予定です。

ところで、この代打注文は確かに日本の陶芸に刺激を与えましたが、世界を回っていると、「これが九谷焼か?」と首をひねりたくなるようなギトギトした悪趣味な作品にお目に掛かることがよくあるんですよ。輸出用にあえて向こう受けを狙ったんでしょうが、何だかこっちが恥しくなってくる(笑)。

吉村 そんなに趣味が悪くなくても、見ててこれは日本製なのか、その複製なのか分からないものもありますね。今回展示される「色絵柿右衛門写し幾割図八角皿」もそのひとつで、これは一八世紀初頭にマイセンで作られた

ものです。また、漆器のコピーも多く、一六一〇年にはオランダで「ジャバニング」と呼ばれる模造漆器が作られましたし、少し遅れて英国では「模造蒔絵の作り方」という本まで出版されているぐらいです。

三杉 見分けがつかないといえは展示品の中にも、同じ原図を伊万里と景德鎮でそれぞれ作った焼き物がありますが、これなど怖い程そっくりなですよ。かと思うと、オランダ画家のコレネリス・ブロンクの絵付発注用原図の流れをくむ景德鎮製と日本製の輸出用磁器は、逆にそれぞれのお国柄が表われていて面白い。

今度の陳列ではマイセン、伊万里、デルフトなど別の窯で作られた同じような柄の焼き物の組み合わせがいくつが出来ます。ただ、一般の観覧者に、ズラッと並べられた類似品の微妙な違いをどこまで楽しんでもらえるかは、ちよつと心配なんですけれどもね。

吉村 第二部はヨーロッパ趣味が日本の工芸や絵画にどのような影響を及ぼしたか、というところが主なテーマになっています。例えば絵画でいけば「南蛮屏風」。西洋甲冑を家康が具足に仕立てたといわれる「南蛮具足」。「祇園会鯉山掛装類見送り」はフランドル（ベルギー）製のタペストリー（壁かけ布）で、日本では部屋に掛ける習慣がないので祇園祭の飾りとして使ったものです。また、秀吉がベルシヤの織物を仕立て直した「綴織鳥獸文様陣羽織」など西洋からの渡来品のほかに、ヨーロッパの文物をモチーフにした日本製の工芸品も多く展示されます。

それに、キリシタン関係の絵画・工芸も約十五点が展示されます。教科書でもおなじみの「聖フランシスコ・



染付芙蓉手虎文血景徳鎮窯17世紀初期

ザビエル像」。ミサの道具である「七宝繫蒔絵螺鈿書見台」は、日本で作られた輸出用漆器の美的到達点を知る意味で格好の作品です。記録によると一六世紀には京都に輸出用漆器を作る工房があり、五十人の職人がいたといわれています。

三杉 そうそう、シーボルトのコレクションも見ものですね。

吉村 そうでした。長崎市立博物館にあるシーボルトの娘・幼少のイネと日本妻・タキの肖像を嵌入了た盒子（香料を入れる容器）と似たものがライデン国立民族博物館にもあるんです。もともと、一八二九年の追放時にシーボルトは二つともを本国へ持ち帰ったのですが、彼が再来日した折に、片方を日本に残しておいたんですね。それが、今回、神戸で百数十年ぶりに再会することになったんです。

三杉 ライデンの盒子に描かれた人物が誰かは分かんないですよ。

吉村 私の考えでは、おそらくシーボルトの先生じゃないかと思うんです。というのは、日本の盒子にはイネとタキの毛髪が収められていましたが、ライデンのには先生の毛が入っていたそうですよ。

三杉 ほお。それは初耳ですね。ともあれ、今回の「海のシルク・ロード」は、色々な意味で見どころのある異色の展覧会です。また、オランダ文化庁のホトケさんがおっしゃっていましたが、レンブラントやゴッホで代表されるオランダにもこんな面白いものがある。同国のもうひとつの顔を知ることが出来るでしょう。

吉村 ええ、そうですね。日本のオランダに対する認識の低さは現代蘭和事典が出版されていないことにも明かです。これを機会に日蘭友好の一助になれば結構ですね。

□入館料／一般八〇〇円（七〇〇円）大・高生五〇〇円（四〇〇円）中・小生三〇〇円（二〇〇円）（～）内は前売料金及び30人以上の団体料金
□開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）毎週金曜日は午後7時まで開館（月曜休館）
□神戸市立博物館／神戸市中央区京町24 電話〇七八三九一〇〇三三五

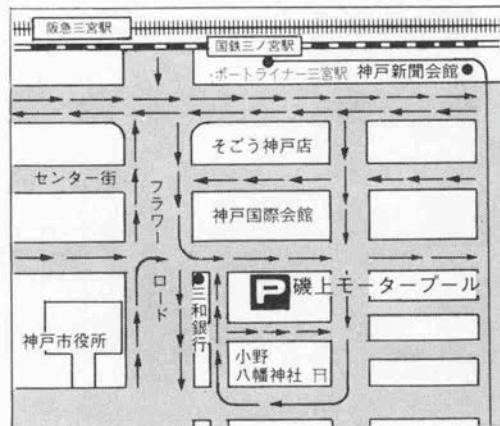


自走式立体モータープール

ビジネスに！
ショッピングに！
ご利用ください



- 収容台数 300台
- 月極駐車可
- 年中無休
(8:00AM~11:00PM)



磯上モータープール (神戸国際会館前) TEL (078) 251-7873

■るぼるたーじゅ 〓1〓

神戸25時

南 ゆう子 〓詩人〓

隣街へ——出発の朝

1982年秋。たまたま芦屋にきていた妹みたいなミス・テリーを誘って、非日常的な感じで隣街を歩いてみようと思った。

私が生まれ、そして育ったのは、神戸市発祥の地「兵庫」であり、今は仕事の関係で芦屋に住んでいるが、三宮から東、つまり東神戸というのは、私にとってほとんど常に通過するばかりの見知らぬ隣街であった。もちろ

ん、この隣街のどこにどんな史跡や建物があるかなどは遠来の客に講釈師然と語ってきかせる程度の知識を私ももちあわせていたけれども、それは実際には大部分が机の上の知識でしかなかった。

実際は知らない夢想上の隣街——という、私はすぐに昔みたヒッチコックの映画を思い出してしまふ。それは、隣街に行こうと夢想し続けた男の物語であった。

毎朝、通勤電車の窓から見える隣街を通過するたび、男はいつかこの街に降りてみたいと考える。男は、その街の公園のベンチにすわり、陽ざしをいっぱいに浴びながら、子供たちが楽しげに遊び、老人たちが静かにお喋りしている光景を夢想する。あるときは、その見知らぬ街の街角を誰かと自分が語り合いながら歩いていることを思い浮かべたりしていた。それは、男にとって「幸福」を絵に描いたような、心なごむ風景のように思っていた。ある日、男は今日こそその街に降りてみようと思えていた。



松陰女子大学キャンパス



上 8時10分ノ 校門に駆け込む灘高生
中 明るい甲南大学のキャンパス
下 カナディアン・アカデミー

て家を出た。男はこの上なく幸福だった。今日こそ、いつも通過することしかなかったあの幸福な夢の街に自分が行こうとしているのだと、胸をおどらせいつものように電車に乗った。そして近づいてくる「幸福」を夢想していた。電車は限りなく確かにその街へと近づいていく。が、次の瞬間、電車は急停車し、その勢いで男は駅の手前でふりおとされてしまう。男がふりおとされたのはいつも夢想しつつ通過してきたあの隣街であった。男はついに焦がれていた隣街にひとりで行きつくことができたのだ。ただし、死という代償を支払ってではあったけれども……。

死にはしない。私とテリーとの場合には、多分死なないだろうとは思っていた。しかし、ミス・テリーという美少女の名の何という響きの偶然、今日はミス・テリー同伴のトリップなのである。私は、電車にふりおとされなかったにもレンタ・カーで隣街をまわることに賛同した。

東灘——「酒の街」の昼下り

いつか私たちは、六甲の山裾に拓かれた団地群を眼下に見はるかす高台にきていた。いま通ってきたのが渦ヶ

森。あちらが鴨子ヶ原——高い所に立つと、大昔国引きをした神様の末孫のような気分になる。「地に人の子等は満ちあふれ、それでも地球はまわっている」なんてね。その南が、戦前から高級住宅街で知られる御影・住吉山手、またその南には灘五郷の酒蔵……。

その指先の示す順序に、テリーと南下する。まずは、住吉山手の白鶴美術館へ。古代中国の青銅器展を見る。酒壺のコレクションが多いのは、白鶴酒造とゆかりが深いためののだろうか。……などと考えながら美術館中庭で休憩していると、何だかお酒が恋しくなりはじめた。「ねえテリー、『李白一斗で詩百篇』っていうの知ってる」

自分で酒のくにの仙人とうそふいたという李白が、月の晩、月と自分と自分の影とで盃を交わしているさまを思い浮かべ、その幻と共に盃を交わしたいものだと思っただ。それは何という静かな酒のたしなみ方であろう。仙人願望病を長く患っている私には、李白の生きざまほど心ゆさぶられるものはない。おまけに、一斗で詩百篇、なんとも羨しいかぎりの酔境である。

せめて、李白のツメのアカでも、とばかり私とテリーは次の予定地、古い街並を残した灘五郷へと足をむけた。

うらかな秋の日

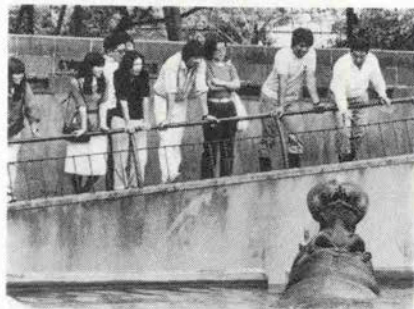
の昼下り、人通りのまばらな街を歩いていると、何だか異空間にまぎれこんだような錯覚におちいりそうだ。塀の向う側を覗きこむのが恐いような見てみたいような、——塀のむこうには深い地球の割れ目があるのだ。歴史という不可視の



上 白鶴美術館・中国青銅器のまえて〈筆者〉
下 酒蔵の街「灘」は神戸のもう一つの顔だ

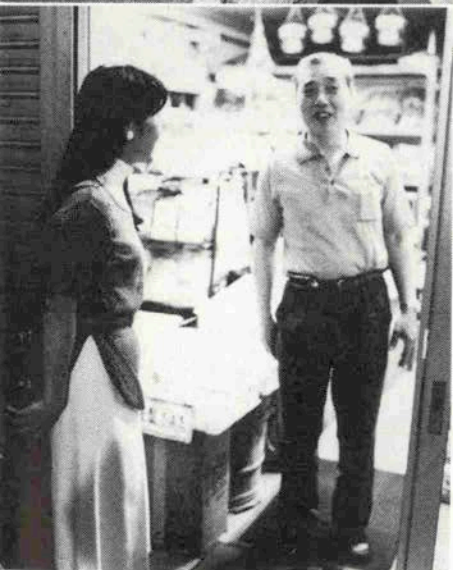
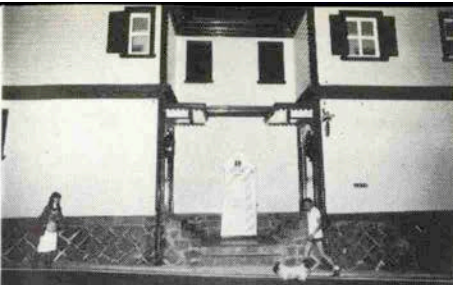
縦軸が、地表の一点から深くつきでているのだ。ほら今も路地の片隅で、あのようにならずくまっているもの、あれは三百年前の私たち——
 酔っ払っていたのではなかった。ただ酔っ払っているふりがしたかっただけの話である。酒蔵の街の昼下り、白日夢であれ何であれそれは私たちのこの街に対する礼儀のつもりであった。

王子動物園は貴重な街のオアシスだ



灘、三宮——街の夕暮れ

閉館前の動物園は物悲しい。閉館のアナウンスで足早に出口にいそぐ人たちも、檻の中の動物たちもみんなな疲れしている。帰るべきところなんか、実はどこにもないのだけれど、何故かどこかへ帰らねば——と思い、うつろな目を夕暮れ空の暮れのこった一隅へと向ける。帰るべきところがさだかでないまま、かといって、今朝あとにした昨日の寝ぐらが永遠に自分の棲家とも信じ



られないまま、人々は街の雑踏に自分の居場所をたずねもとめる。乗り遅れた電車の後を追跡でもしているように——。

乗りあげるのはいたい場末の呑み屋。強い酒を一気に飲みほすと、ほんのり男たちの顔にも優しさがかえってくる。きつと明日もここに帰ってきます。その顔に書いてある。それから先は、どこに行っても生きていけるものだ。それが帰るべきところであろうかどうであろうか——どうでもよくなってくる。

私達の迷い込んだのは、1982年の南京町。思えば10数年ぶりのこと。街はすっかりきれいになって、思い出の南京町ははるかに遠い。あの角のおいしかった豚饅頭を売ってた店はどうしたのかな。漢文よりも英語に強かったあの頃の中国人の同級生の顔が浮かぶ。

見知らぬ街となり果てた街に、昔日の思い出を結びつけるのは容易ではない。過ぎた時間の長さに溜息がでる。夢と現実が交錯する。「遊戯ですや、人生は。それが美しくして幸福なら、それは遊戯です」——うそぶく私の目に、懐しい中国人一家の乾物店の灯がとびこんできた。見知らぬ街にも、私の時間的隣街は生き続けた。

深夜の三宮・夜明けの隣街

まだ明けやらぬ東部市場——私とテリーは深夜の三宮

上 北野は小さな外国のようだ。洋館長屋前
 中 北野のゴックスタッドで腹こしらえ
 下 南京町ではなつかしい知人の家へ



軟弱小物(?)の山、東部市場は暗いうちから活気づく

深江の東部市場——午前四時、まだ魚市場の活気はない。少しづつ少しづつトラックが荷をおろし始めていた。
真夜中でも、夜明けでも、街は眠らない。とても百

気なくそれに見とれて立っていた二人が、次の場所へと移動しようと顔を上げたとき、私達が松茸の山のすぐ向こうに見たのは「軟弱小物」その文字であった。
△カメラ・
太田順一▽

おはよう。六甲アイランドに朝一番のフェリーがついた

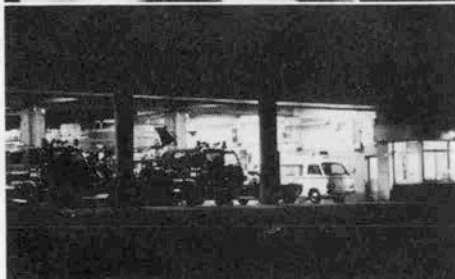


神戸滞在期間の長からぬテリリーに、余すところなく隣の街の一日を見てもうらためには、少なからず体力を要する。「こんな神戸見物をするのは、後にも先にもないというような案内をしよう」と言って誘ったのは私だが、テリリーにこの旅がどんな記憶として残るかはさだかでない。しかし、どうやらここまできたら、25時間神戸を見て歩こうと覚悟したのは私だけではなかったようだ。

鬼夜行なんてできないように、人は街をつくってきただけで、行く先のなくなった鬼たちが安住の地として住み始めたのは、人の心の闇でないことを願いたい。夜が明ける。東部市場はいよいよ活気づいてきた。魚のせりが始まる。次々に出荷されていくトロ箱。しばらくテリリーも私も魚のせりをあちこちとみて歩く。

一時間後、魚のせりも終りに近い頃、私たちは青果卸売りの準備にとりかかっている所へ移動していた。季節的に松茸が山積みになされ、人々は懸命にそれを選別・小分けしていた。何

を徘徊したあとで、再び深江の、即ち土地的隣街へと戻ってきた。



上 三宮駅前の屋台で一杯。こたえられない一時
中 深夜の消防署には诗情さえ漂う
下 静まりかえった新神戸駅前の地下鉄工事現場

神戸25時

鈴木 漠△詩人▽

「万物は流転する」と説いたのは、古代ギリシャの哲人だ。孔子も川のほとりで、「過ぎゆくものは昼も夜もとどまることがない」と言った。刻々と移る時間の流れの中で、神戸の街は、折々にどんな表情を見せているだろうか。24プラス1時間という小さな時のダムにせき止めたその顔を、一昼夜探訪してみようというのである。

一日はどこから始まってどこで終るのか、ともかくも



やがて埋め立てられる運命にあるメリケン波止場（後にポートタワーを望む）。

夜来の雨があがったメリケン波止場に出かける。水溜りに曙の色がにじんでいる。今、はしけ溜りになっている水域は、近く埋め立てられて公園になるはずだ。日の出とともにタグボートがはしけを迎えに来て、次々に船名を呼びたてる。港の朝は、やはりこの曳航作業から始まるのである。

突堤の端に糸を垂れる釣人たちの魚籠をのぞいたあと坂をのぼって関帝廟に至る。「三国志」でおなじみの英傑関羽をまつる関帝廟は、俗に南京寺とよばれる。朝まだき、香煙はまだ上っていないが、彩色あざやかな四阿に腰をおろして、老人が一人もの思いにふけていた。朱色や青の明るい色調の中にも一種ミステリアスな風情が廟のうちそとに漂い、たとえば李賀の詩の一節でも思いつくというものである。

園中に樹を植うるなれば 樹を植うれば四時愁う……

下山手通を西へたどって大倉山界隈は、神戸文化ホール、中央図書館、中央体育館などが集まって、文化の中枢をなしている。「文化」というものの定義は総じてむつかしい。『広辞苑』は、「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称」だと規定する。二十世紀最大の文化史学者ホイジンガは、文化の、ひいては人間の本質は「遊び」にあると言った。遊びといえは、文化ホール横に、神戸生まれの日本画家橋本関雪の顕彰碑が建

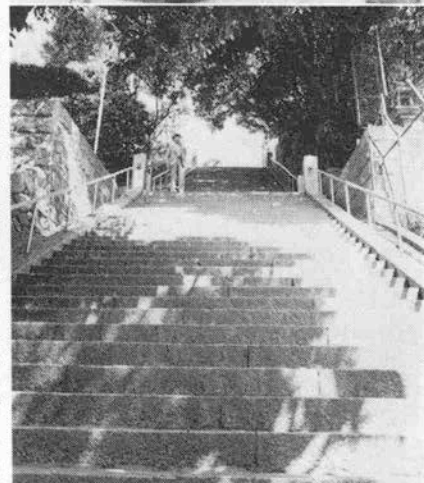


中突堤風景

っている、関雪の字で「遊於芸（芸に遊ぶ）」と彫られているのが、何か符節を合わせたように楽しい。

北行して有馬街道に近く、臨済宗の名僧盤珪禪師ゆかりの祥福寺を訪ねる。塵一つとどめぬ簡素な玄関に、板きれみたくになるまで履き古した下駄が一足、端然と揃えられてあるのが印象に残った。そういえば山門脇にまあたらしい石碑があり、「捨てられるものの為に」という言葉が彫られていたが、ぶしつけな訪問にも、快く抹茶をご接待くださった知客さん（接待係の役僧）の話では、物を粗略に扱った昨今の風潮を戒めて建てられたものとのことだった。

南へおよそ4キロ、中央卸売市場の活況を横目に、兵庫運河をめぐる。築島橋、入江橋、大輪田橋、浮橋、材



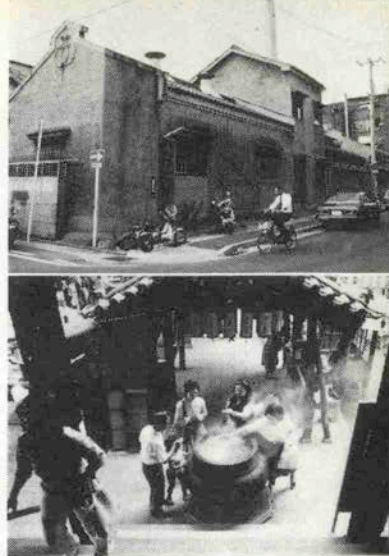
（上）朝の静寂に包まれた関帝廟（中）楠正成の墓のある湊川神社（下）石段のつづく祇園神社

木橋、高松橋等々。運河にかかる大小の橋とその周辺には、木材問屋、製粉会社、そのほか種々の大工場や倉庫が建物を連ね、昔日のにぎわいをしのばせる。兵庫運河は明治時代に、神田兵右衛門たちの献身で開削された。海上交通の一難所である和田岬沖を通らないで、駒ヶ林から兵庫港へ直接船を出入させられるのと、安全な避泊地を確保する目的をもって施工されたというが、おそらく未曾有の大事業であっただろう。運河を美しく、という地元の人々の願いが効を奏してか、水は相当にきれいになっており、遊泳するボラの群れが、橋の上からも見える。

福原遷都八〇〇年を記念して建てられた平清盛像は、琵琶塚、清盛塚とともに、大輪田橋のほとりにたたずんでいる。運河を横きって、単線の国鉄和田岬線が走り、朝夕のラッシュアワーには鈴なりの通勤客を運ぶのだが、



（上）臨済宗の名刹・祥福寺（中）同寺の知客寮さんと（下）木材が集荷されている兵庫運河



(上) 長田は「ゴムの街」。今も古い町並みがある
(下) 参詣の老若男女で賑わう須磨寺境内

いま和田岬駅構内は人影もなく、森閑としている。ちょうど、三菱重工神戸造船所のサイレンが正午を告げた。

午後、新長田に出て、ジョイプラザ25階のレストランからの眺望を楽しみながら、少し遅い昼食をとる。昭和52年に、地下鉄西神戸線が開通したのを一つの契機として、いわゆるゴム工場街も急速に変貌しつつあるようだ。かつて路地裏にまで密集していたケミカルシューズ関連の零細な町工場群は、協同組合管理の工場団地に大半集約されて、近代化の実効をあげているという。いまやファッション産業の一翼をになっており、その製品もケミカルシューズとは言わないで、ファッションシューズと

よぶのである。

太陽が西へ傾く頃、須磨離宮公園の噴水の造形に私は見とれている。眼下の須磨の海を借景とする庭園のすばらしさはもちろんだが、この公園を舞台に、ピエンナーレ(隔年)形式で催される現代彫刻展は、神戸の秋を彩る風物詩として、もはや欠かせぬ存在になっていよう。ちょうど今年が開催年にあたっており、10数トンはあるような石彫の大作、太陽電池を利用した動く彫刻などの意欲作が、ひろびろとした芝生の中に点在して、刺激的な現代の美を競っているのである。

「須磨のお大師さん」であまねく知られる須磨寺は、たまたま縁日とあって、参詣の老若男女でごった返していた。敦盛遺愛の青葉の笛については、『平家物語』クライマックスの一つで、いまさら言うまでもないが、芭蕉も、紀行文『笈の小文』の中に佳吟を残した。

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

大正時代の放浪俳人尾崎放哉が、しばらく須磨寺の堂守をつとめたことは、人々の記憶から、もう消えかけているのではないか。萩原井泉水の閑雅な筆跡で、美しい句碑が残されている。

こんなよい月を一人で見て寝る／放哉

第二神明道路を西へ進み、垂水・舞子の高台にひろがる大ニュータウン風景を一望したあと、五色塚古墳を訪れた。想像以上に雄大な前方後円墳の頂上に立つと、逆光に輝く明石海峡をはさんで、淡路島は指呼の間にせまる。幾組かのアベックが夕日にかきろい、幼い孫の手をひいた老人が散策するが、このみごとな夕景の中では、人間の営みは、あまりに小さく見えないうか。ただ風景をして語らしめよ、だ。大小の船がひっきりなしに海峡を行き交い、太陽は水平線上を移りつつある。

舞子公園で日没となった。中国人貿易商呉錦堂が大正

初期に建てた移情閣・通称舞子六角堂が、波打際に端麗なシルエットを見せている。革命家孫文も寄宿したこの異色の建築物は、正しくは八角形をしており、「八角堂」と説明するガイド書もあるようだが、それでは理に落ちて一向におもしろくない。どの方角から眺めても、八面あるはずの壁の三面しか見えないので直観的に「六角堂」と名づけたであろう往時の人々の認識をこそ、私はほえましく思うのである。

とつぷり暮れた垂水・須磨を後に、ポートアイランドまで取って返す。超高層の神戸ポートピアホテル、その30階から眺める夜景の美しさは筆舌に尽くしがたい。西脇順三郎の詩句をもじって、(覆された宝石)のような夜、と言ってみても、なお及ばぬ趣だろう。風力発電によって点灯する市章山のイルミネーションが、北側正面に光り、ポートライナーの灯が連なつて、ゆっくり神戸大橋を越える。

同じポートアイランドに昨年開設された神戸中央市民病院は、最新の医療設備を誇り、病棟のレイアウトも斬新なモダンな施設である。昼間の混雑ぶりとはうって変わって深夜のコンテナ埠頭を背景に静まっているが、救急入口は夜どおし灯が点り、毎晩必ずといってよいほど



舞子・移情閣は通称六角堂と呼ばれる。舞子の浜に今、まさに陽が沈もうとしている。

数台の救急車が到着する。まことにここには、人生絵図の幾こまかがある。病苦に呻吟する人もあれば、呱呱の声をあげる、生まれたばかりの生命もあるのだ。



夜更けの神戸中央市民病院。

第二日目、六甲連山が明るむ刻、神戸大橋を渡り、早朝登山のメッカの一つ、再度筋・燈籠茶屋へむかった。神戸市民山の会をはじめ、数十団体に及ぶ早朝登山同好会が、茶屋に署名簿を備えて、登山回数を記録している。詩吟、謡曲、民謡同好会等さまざまな登山同好会の中に、「神戸中華倶楽部」「印度早朝登山愛好会」などの名が見えるのは、燈籠茶屋ならではの趣であろう。壁に張り出された登山回数累計表を見て、大いに驚いた。一八八〇〇回に達する人がいるのだ。毎日欠かさず登り続けたとしても、五〇年を越える勘定である。中国語で屈託のないお喋りを楽しむ老人や、インド人の母娘に囲まれて、おでんを頬張りながら、神戸という街の真髄に、あらためて触れる思いを重ねた。

再度山ドライブウェイ横の尾根に登ってみた。扇の形に開かれた神戸港の東半分は、金色に染まっている。

——日はまた昇る……

扇の中央、ポートアイランドを迂回しながら、純白の外国豪華客船が、いま、ゆっくりと入港してくるところである。



軍者の住まうポートアイランドの深夜。

△カメラ・中村昇治▽